

成3～5年度には、文部省科学研究費補助金特別推進研究「有機強磁性体の精密分子設計と構築の研究」を遂行され、ひとつのピークを築かれました。これら有機化学の分野での顕著な業績により、昭和38年には日本化学会進歩賞を、平成4年には、日本化学会学会賞を受賞されました。国内の学会活動でも指導性を発揮しておられ、日本化学会副会長、関東支部長を務められました。

岩村先生は、“まだやり残したやりたいことがある”という言葉を残して九州へ移られ、今後は引き続き、九州大学有機化学基礎研究センターのセンター長、教授として研究、教育、行政に従事されることになっております。これからも、くれぐれもお体に気を付けて、私の“ターミネーター古賀”という悪いニックネームを吹き飛ばしてください。お願いします。

バイオメカニクスのこと

遠藤 万里 (人類学専攻)



ここではバイオメカニクス (生体力学) 全体の話をするつもりはない。ただ私の関わったことを述べる。

日本においては、現在のところバイオメカニクスというと工学と医学が連携して行なっている応用科学として理解されているようである。しかし、20世紀初頭にバイオメカニクスという学問領域ができたのは、有名な発明学者ヴィルヘルム・ルーを中心とする基礎医学者や動物学者であった。当時は生物体の巨視構造・仕組みにはいかにも当時のニュートン力学で鮮やかに説明し得るよ

うに思われていた。そして、それらの分析がはじめられた。

しかし、生物のように複雑な物体のもつ力学的特性は20世紀初頭の機械力学や材料力学で解くことは不可能に近かった。ようやく、1940年代から材料力学における実験応力解析や、動力学において運動の位置、加速度のセンサーなどが開発され、それが生物体にも適用できると考えられ始めた。こうした研究者も解剖学者や動物学者であった。

私はこのような背景のもとに1953年から骨格構造の実験応力解析や歩行運動の動力的解析を始めたのだった。その当時日本ではまだバイオメカニクスという言葉さえ知られていなかった。

しかし、私が停年となる今日ではかなり様変わりしていて、多くの工学者と医学者がバイオメカニクスを専門とし、専門の機器も開発され、応用領域のみならず基礎領域でも盛んに研究を進めている。当然のことであるが、学問の進歩や様変わりは著しいといえる。